



南吉オリジナル版

ごんぎつね

新美南吉・作

室田里香・絵

権狐

表記にらつた

解説・「らつたのうんぎつね」

権狐ごんぎつね

茂助もすけというおじいさんが、私たちの小さかった時、村に
いました。「茂助じい」と私たちは呼よんでいました。茂助
じいは、年とつっていて、仕事ができないから子守こもりばかりし
ていました。若衆倉わかいしゆぐらの前の日だまりで、私たちはよく茂
助じいと遊びました。

私はもう茂助もすけじいの顔を覚おぼえていません。ただ、茂助じ
いが夏なつみかんの皮かわをむく時の手の大きかった事ことだけ覚おぼえて
います。茂助じいは、若い時、獵師りようしだったそうです。私が、

次にお話するのは、私が小さかった
時、若衆倉わかいしゅぐらの前で、茂助じいからき
いた話なんです。

一

な
なか
や
ま
むかし、徳川様とくがわさまが世をお治めおさになっ
ていられた頃ころに、
中山なかやまに小さなお城があつて、中山様
というお殿さまとのが少し



の家来けらいとすんでいられた
ました。

その頃、中山から少し
離れた山の中に、権狐ごんぎつねと
いう狐きつねがいました。権狐
は、一人ぼっちの小さな
狐で、いささぎの一ぱい
しげった所に、洞ほらを作っ
て、その中に住すんでいま
した。そして、夜でも昼

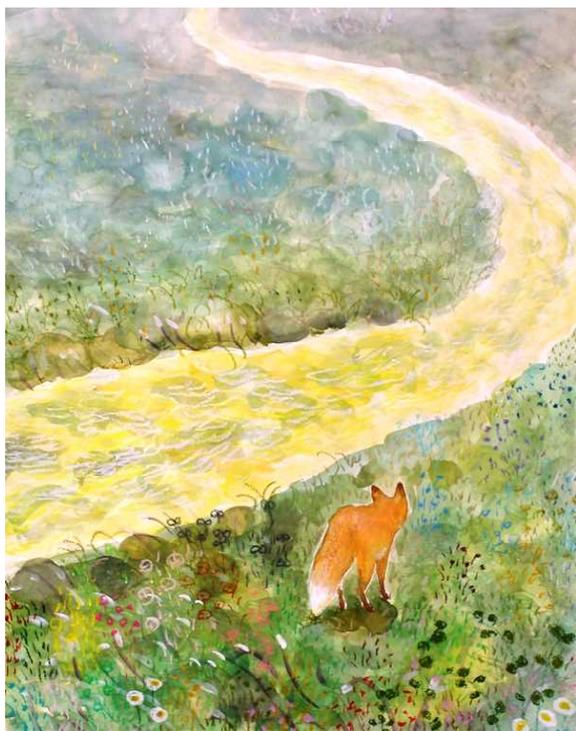


でも、洞を出ていたずらばかりしました。畑へ行って、芋いもを掘ったり、菜種なたねがらに火をつけたり、百姓屋ひやくしやうやの背戸せどにつるしてある唐辛子とうがらしをとって来きたりしました。

それはある秋のことでした。二三日雨が降ふりつづいて、権狐は、外へ出たくてたまらないのをがまんして、洞穴ほらあなの中にかがんでいました。雨があがると、権狐はすぐ洞を出ました。空はからつと晴れていて、百舌鳥もずの声がけたたましく、ひびいていました。

権狐は、背戸川せどがわの堤つみに来ました。ちがやの穂ほには、ま

だ雨のしずくがついて、光っていました。背戸川はいつも水の少ない川ですが二三日の雨で、水がどっと増ましていました。黄きなくにごった水が、いつもは水につかっている所のすすきや、萩はぎの木を横たおに倒しながら、どんかわしも川下へ流れて行きました。権狐も、川下へ、ぱちやぱちやと、ぬかるみを歩いて行きました。



ふと見ると、川の中に人がいて何かやっています。権狐は、見つからないように、そーつと草の深い方へ歩いて行って、そこからそちらを見ました。

「兵ひょうじゆう 十じゆうだな。」

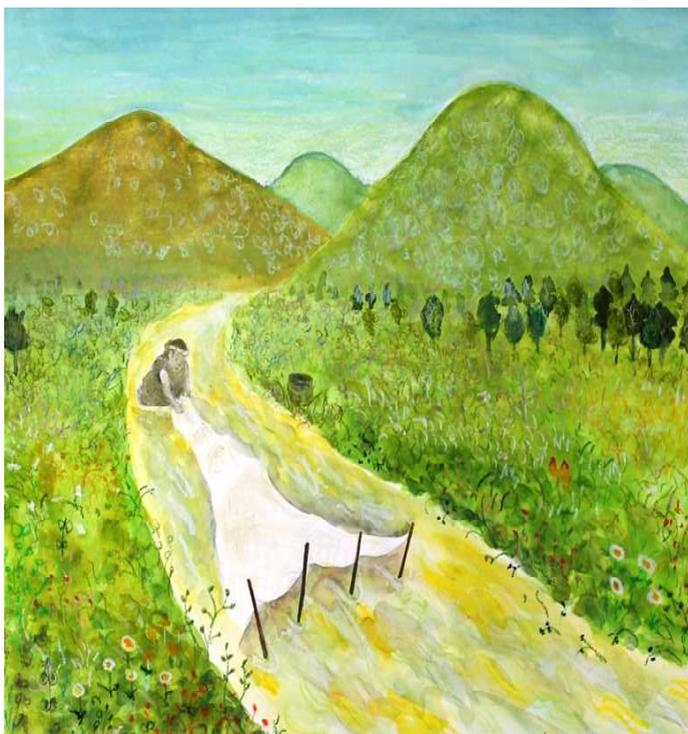
と権狐は思いました。

兵十は、ぬれた黒い着物きものを着て、腰こしから下を川水かわみずにひたしながら、川の中で、はりきりと言う、魚をとる網あみをゆすぶっていました。鉢巻はちまきをした顔の横に、円まるい萩はぎの葉が一枚、大きな黒子ほくろみたいにはりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一番うしろの、

袋ふくろのようになつたところを水の中からもちあげました。
その中には、芝しばの根
や、草の葉や、木片もくへんな
どが、もじやもじやし
ていましたが、ところ
どころ、白いものが見
えました。それは、太
いなぎの腹はらや、大き
なきすの腹でした。

兵十は、魚籠びくの中



へ、ごみも一緒に、そのうなぎやきすを入れました。そしてまた、袋の口をしばって、水の中に入れました。

兵十は魚籠を持って川から上がりました。そして、魚籠をそこに置くと、着物の端から、ポトポトとしずくを落としながら、川上の方へ何か見に行きました。

兵十がいなくなると、権狐はぴよいと草の中からとび出して行きました。魚籠にはふたがなかったので、中に何かあるか、わけなく見えました。権狐は、ふといたずら心が出て、魚籠の魚を拾い出して、みんなはりきり網より下の川の中へほりこみました。どの魚も、「とぼん！」と音を

立てながら、にごった水の中に見えなくなりました。一番おしまいにも、あの太いうなぎをつかもうとしましたが、このうなぎはぬるぬるして、ちつとも権狐の手にはつかまいません。権狐は一生懸命いっしょうけんめいになつてうなぎをつかもうとしました。

とうとう、権狐は、頭を魚籠の中につつ込んで、うなぎ



の頭をくわえました。うなぎは、

「キュッ」と言つて、権狐の首にまきつきました。その時兵十の声が、

「このぬすつと狐ぎつねめが！」と、すぐそばでどなりました。

権狐はとびあがりました。うなぎをすてて逃にげようと思いました。けれど、うなぎは、権狐の首にまきついてはなれません。権狐はそのまま、横つとびにとんで、自分の洞穴ほらあなの方へ逃げました。

洞穴近くのはんの木の下でふり返つて見ましたが、兵

十は追つて来きませんでした。

権狐は、ほっとしてう
なぎを首から離はなして、洞ほら
の入口の、いささぎの葉
の上ののせて置いて洞の
中にはいました。うな
ぎのつるつるした腹はらは、
秋のぬくたい日光にさら
されて、白く光っていま
した。



十日程ほどたって、権狐が、弥助やすけというお百姓ひやくしやうの家の背戸せどを通りかかると、そのいちじくの木のかげで、弥助の妻つまが、おはぐろで齒を黒く染そめていました。

鍛冶屋かじやの新兵衛しんべえの家の背戸を通ると、新兵衛の妻が、髪かみをくしけずっていました。

権狐は、

「村に何かあるんだな。」と思いました。

「いったいなんだろう。秋祭りだろうか。でも秋祭りなら、



太鼓たいこや笛ふえの音おとが、しそうなものだ。そして第一、お宮みやに
幟のぼりが立つからすぐ分かる。」

こんな事を考えながらやって来ると、いつの間にか、表
に赤い井戸いどのある、兵十の家の前に来ました。

兵十の小さな、こわれかけの家の中に、大勢の人がはい
つていました。腰こしに手ぬぐいをさげて、常つねとは好よい着物を
着た人たちが、表の、かまどで火をくべていました。

大きな、はそれの中では、何かぐつぐつ煮にえていました。

「ああ、葬式そうしきだ。」

権狐はそう思いました。こんな事は葬式の時だけでした



から、権狐にすぐわかりました。

「それでは、誰だれが死んだんだろう。」とふと権狐は考えました。

けれど、いつまでもそんな所にいて、見つかつては大変ですから、権狐は、兵十の家の前をこっそり去って行き

ました。

お正午ひるがすぎると、権狐は、お墓はかへ行つて六地藏ろくじぞうさんの
かげにかくれていました。いい日和ひよりで、お城の屋根瓦がわらが
光っていました。お墓には、彼岸花ひがんばなが、赤い錦にしきのように
咲いていました。

さつきから、村の方で、「カーン、カーン」と鐘かねが鳴つ
ていました。葬式そうしきの出る合図あいずでした。

やがて、墓地ぼちの中へ、やって来る葬列そうれつの白い着物が、ち
らちら見え始めました。鐘の音はやんでしまいました。話
し声が近くなりました。

葬列は墓地の中へ入って来ました。人々が通ったあと、
彼岸花は折れてい
ました。

権狐はのびあが
って見ました。

兵十が、白い
袴かみしもをつけて、
位牌いはいを捧ささげていま
した。いつものさ
つま芋いもみたいに元



気のいい顔が、何だかしおれていました。

「それでは、死んだのは、兵十のおっ母だ。」

権狐はそう思いながら、六地藏ろくじぞうさんのかげへ、頭をひっこめました。

その夜、権狐は、洞穴ほらあなの中で考えていました。

「兵十のおっ母は、床とこにふせていて、うなぎが食べたいと言ったに違ちがいがない。それで兵十は、はりきり網あみを持ち出して、うなぎをとらまえた。ところが自分がいたずらして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おっ母にうなぎを食べさせることができなかつた。それで、おっ母は、

死んじやったに違いない。うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと言いながら、死んじやったに違ちがいない。あんないたずらをしなけりやよかつたなー。」

こおろぎが、ころろ、ころろと、洞穴の入口でときどき鳴きました。



兵十は、赤い井戸いどの所で、麦むぎをといでいました。兵十は今まで、おつ母と二人きりで、貧ますしい生活をしていたので、おつ母が死んでしまふともう一人ぼっちでした。

「俺おれと同じように一人ぼっちだ」

兵十が麦をといでいるのを、こつちの納屋なやの後うしろから見ていた権狐はそう思いました。

権狐は、納屋のかげから、あちらの方へ行こうとすると、どこかで、いわしを売る声がしました。

「いわしのだらやす——。いわしだ——。」

権狐は、元氣のいい声のする方へ走って行きました。

芋畑いもばたけの中を。

弥助やすけのおかみさんが、背戸口せどぐちから、

「いわしを、くれ。」と言いました。いわし売りはいわし

のはいった車を、

道の横に置いて、

ぴかぴか光るいわ

しを両手でつかん

で、弥助の家の中

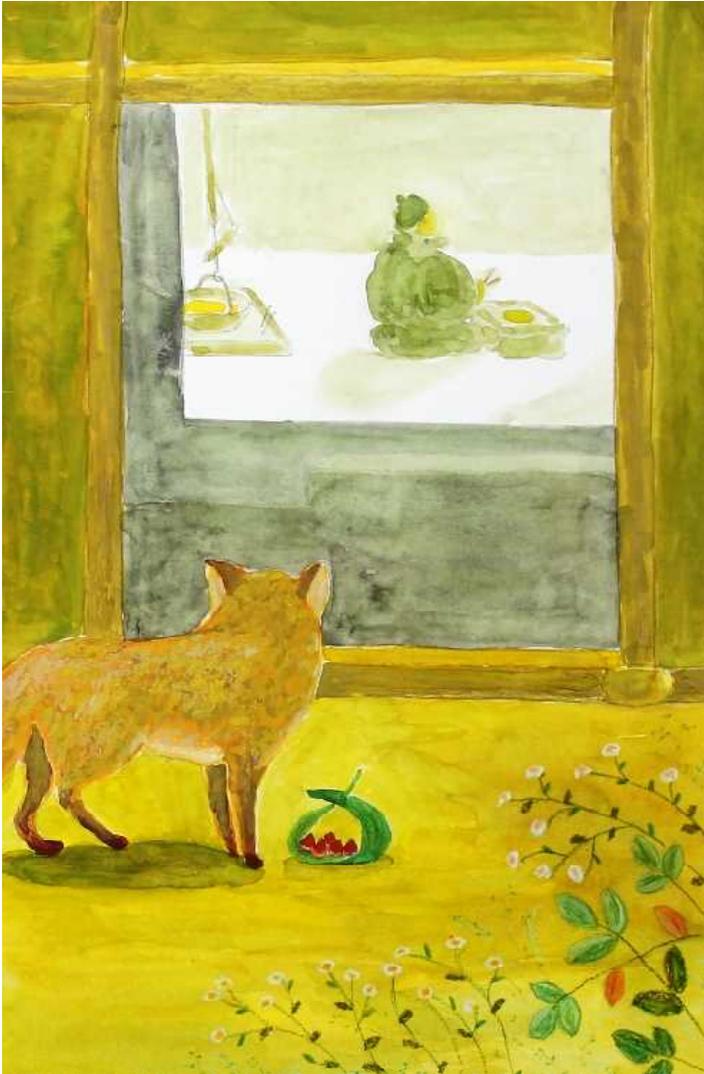


へ持つて行きました。そのひまに、権狐は、車の中から、五六匹びきのいわしをかき出して、また、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家の背戸口から、家の中へ投げこんで、洞穴ほらあなへ一目散いちもくさんに走りました。はんの木の所で立ち止まって、ふりかえつて見ると、兵十がまだ、井戸の所で麦をといでるのが小さく見えました。

権狐は、何か好よい事をしたように思えました。

次の日には、権狐は山へ行つて、栗くりの実を拾ひろつて来ました。それを持つて、兵十の家うちへ行きました。背戸口からうかがつて見ると、ちょうどお正午ひるだったので兵十は、お

正午ひるめし飯のところでした。兵十は茶碗ちやわんをもったまま、ぼんやりと考えていました。



変な事には、兵十のほつぺたに、すり傷きずがついていました。どうしたんだろうと、権狐が思っていると、兵十がひとりごと独言を言いました。

「いくらかんがえても分からない。いったい誰だれがいわしなんかを、俺おれの家うちへほりこんで行ったんだろう。おかげで俺は、盗人ぬすびとと思われて、あのいわし屋に、ひどい目に合あわされた。」

まだぶつぶつ言っていました。

権狐は、これはしまったと思いました。かわいそうに、

あんなほつぺたの傷^{きず}までつけられたんだな——。

権狐は、そ——っと納屋の方へまわって、納屋の入口に、持って来た栗の実を置いて、洞^{ほら}に帰りました。

次の日も次の日もず——っと権狐は栗^{くり}の実を拾^{ひろ}って来ては、兵十が知らんでるひまに、兵十の家に置いて来ました。栗ばかりではなく、きのこや、薪^{たきぎ}を持って行ってやる事もありました。そして権狐は、もういたずらをしなくなりました。



四

月のいい夜に権狐は、あそびに出ました。中山様のお城の下を通ってすこし行くと細い往来おうらいの向こうから誰だれか来るようでした。話し声が聞こえました。

「チンチロリン、チンチロリン」

松虫まつむしがどこかその辺あたりで鳴いていました。

権狐は、道の片側によつて、じつとしていました。話し声はだんだん近くなりました。それは、兵十と、加助かすけという百姓ひやくしやうの二人でした。

「なあ加助。」と兵十が言いまして。
「ん」
「俺^{おれ}あ、とても不思議なことがあるんだ」
「何が？」



「おっ母が死んでから、誰だれだか知らんが、俺おれに栗や、きのこや、何かをくれるんだ」

「ふ——ん、誰だれがくれるんだ？」

「いや、それがわからんだ、知らんでるうちに、置いていくんだ。」

権狐は、二人のあとをついて行きました。

「ほんとかい？」

加助が、いぶかしそうに言いました。

「ほんとだとも、うそと思うなら、あした見に来い、その

栗を見せてやるから」

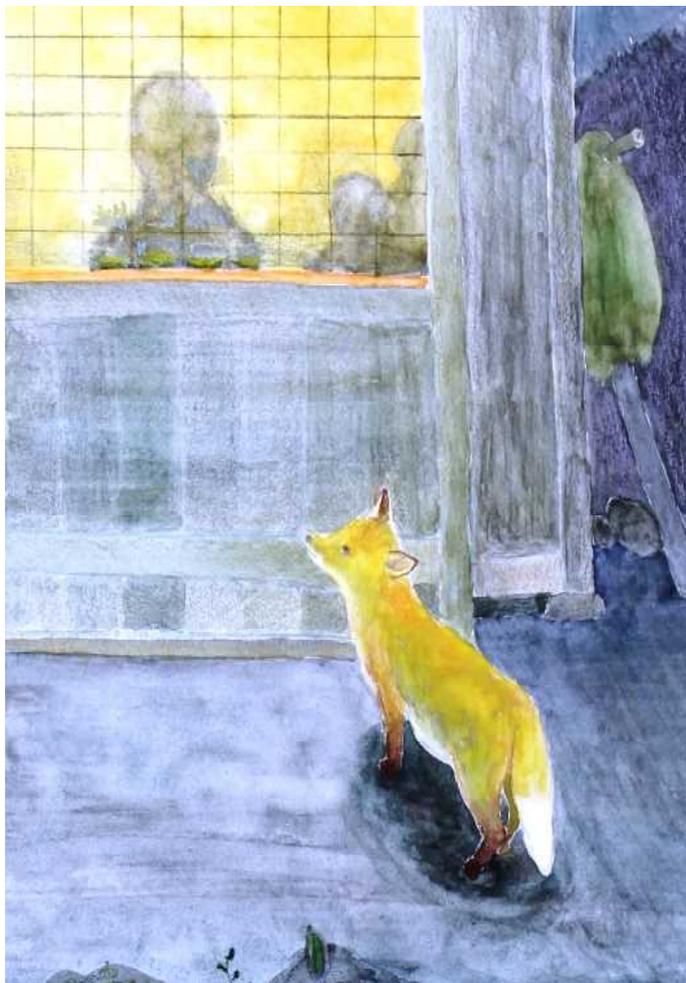
「変だな——。」

それなり二人は黙だまって歩いて行きました。

ひよいと、加助が後ろうしを見ました。権狐はびくつとして、道ばたに小さくなりました。加助は、何も知らないで、また前を向いて行きました。

吉兵衛きちべえと言う百ひやく姓しやうの家まで来ると、二人はそこへはいって行きました。「モク、モクモク、モクモク」と木魚もくぎよの音がしていました。窓まどの障子しょうじにあかりがさしていました。そして大きな坊主頭ぼうずあたまが、うつって動いていました。権狐は、

「お念仏ねんぶつがあるんだな」と思いました。権狐は井戸のそばにしゃがんでいました。



しばらくすると、また、三人程ほじ、人がつれだつて吉兵衛きちべえの家にはいつて行きました。お経きようを読む声がきこえて来ました。

権狐は、お念仏がすむまで、井戸のそばにしやがんでいまた。お念仏がすむと、また、兵十と加助は一緒いっしょになつて、帰つて行きました。

権狐は、二人の話をきこうと思つて、ついて行きました。兵十の影法師かげぼうしをふんで行きました。

中山様のお城の前まで来た時、加助がゆっくり言いだしました。

「きつと、そりやあ、神様かみさまのしわざだ。」

「えっ？」兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「俺おれは、あれからずっと考えたが、どう考えても、それや、人間じゃねえ、神様だ、神様が、お前が一人になったのを気の毒に思つて栗くりや、何かをめぐんで下さるんだ」と加助が言いました。

「そうかなあ。」

「そうだと。だから、神様に毎日お礼言ったが好い。」
「うん」

権狐は、つまんないと思いました。自分が、栗くりやきのこ
を持って行ってやるのに、自分にはお礼言わないで、神様
にお礼を言うなんて。いつそ神様がなけりやいいのに。

権狐は、神様がうらめしくなりました。



その日も権狐は、栗の実を拾ひろつて、兵十の家へ持つて行きました。兵十は、納屋なやで縄なわをなっていました。それで権狐は背戸せどへまわつて、背戸せど口から中へはいりました。

兵十はふいと顔をあげた時、何だか狐が家の中へはいるのを見とめました。兵十は、あの時の事を思い出しました。うなぎを権狐にとられた事を。きつと今日も、あの権狐がいたずらをしに来たに相違そういない――。



「ようし！」

兵十は、立ちあがつて、ちようど納屋にかけてあつた火繩銃ひなわじゆうをとつて、火薬かやくをつめました。

そして、足音をしのばせて行って、今背戸口せどから出て来ようとする権狐を

「ドン！」

とうつてしまいました。

権狐は、ばったり倒たおれました。兵十はかけよつて来ました。ところが兵十は、背戸口せどに、栗の実が、いつものよう

に、かためて置いてあるのに眼をとめました。

「おや——」。

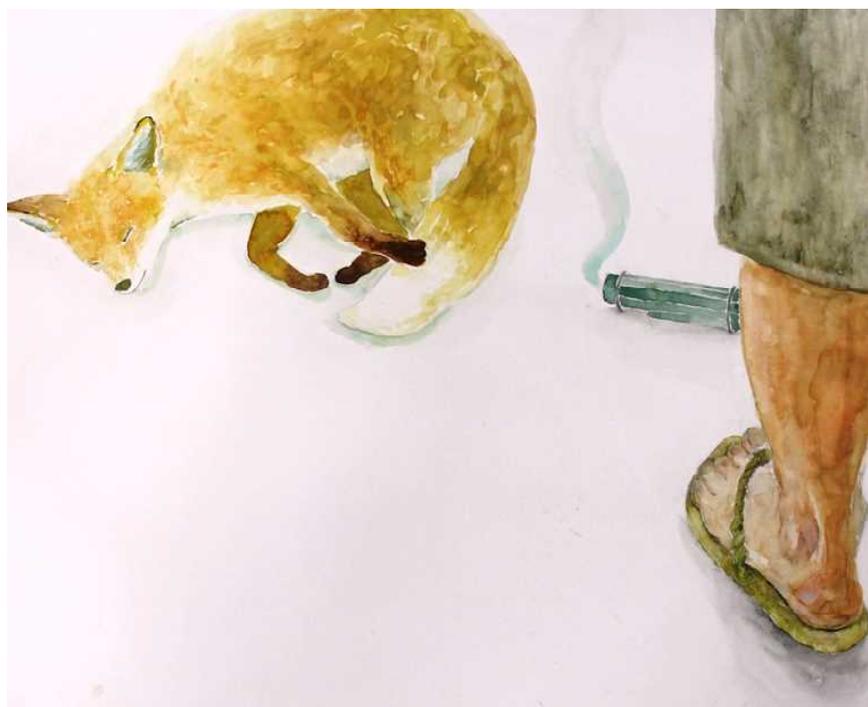
兵十は権狐に眼を落としました。

「権、お前だったのか……。いつも栗をくれたのは——」。

権狐は、ぐったりなつたまま、うれしくなりました。兵

十は、火繩銃ひなわじゆうをばったり落としました。まだ青い煙けむりが、

銃口じゆうこうから細く出ていました。



一
九
三
一
·
一
〇
·
四

表記について

新美南吉が「スパルタノート」に書いた「権狐」を、できるだけ忠実に再現しようとした。小学生が読むことを念頭に置き、以下のように表記した。

1 傍点、ダツシユの形、長さは、原文に近い形にする。

2 旧仮名遣いを、現代仮名遣いにする。

例 ・年とつてゐて↓年とつていて

3 送りがなは、現在の形にする。

例 ・落しました↓落としました

漢字表記は、その箇所イメージの形成が生まれるかどうかを考え、次のいずれかの形にした。

①南吉自筆表記のままにし、ふりがなを付す。

例・百舌鳥（もず）・魚籠（びく）

・黄（きな）く　・黒子（ほくろ）

・お正午（おひる）

②南吉が使用した漢字をひらがなにする。

例・悪戯↓いたずら　・鰻↓うなぎ

・梳って↓くしけずって　・乍ら↓ながら

・蕈↓きのこ　・了う↓しまう

③旧漢字を新漢字にする。

例・喰べる↓食べる　・云う↓言う

5 原文にない場面一の「一」を附す。

6 方言等、説明を要するものを下記に記す。

・いささぎ：「ひさかき」。「さかき」の代用として仏壇や神前にそなえる地方がある。

・背戸：家のうらの方

・ちがや：イネ科の雑草で河原などに群生^{ぐんせい}。白い穂を

出す。

・黄^{きな}く：黄色く

・ぬくたい：あたたかい

・くしけずる：髪^{かみ}をすく。

・はそれ：はそり。端がそっている大鍋のこと。

・常とは好い：常よりも好い

7 読みやすさを見やすさを考え、ところどころで、一行空けをしている。自筆「権狐」には、このような行空けはない。

先頭ページへもどる

解説・二つの「ごんぎつね」について（生誕一〇〇年の年に

1 南吉自筆「権狐」の存在

新美南吉の代表作と言えば、「ごんぎつね」を思いつく人が多いでしょう。一九五六年に教科書に掲載されて以来、延べ六〇〇〇万人の人が読んだと言われています。私も、十数回授業をしました。

授業するたびに、気になる所がありました。

場面一で、魚をにがしているところを兵十に見つかり、ごんはにげます。その後、次の表現が出てきます。

「ごんはほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっと外

して、あなの外の草の上にのせておきました。」（教科書）

頭を「かみくたく」音が聞こえてくるようです。いやだな
と誤ってしまいます。あの魚をにがしたごんが、そんなこと
するのかな。「ほっとしてかみくたく」から冷酷さを感じてし
まいます。それなのに、なぜ、「草の葉の上にのせてお」くの
か。不思議です。「かみくたく」という行いは、他の場でのご
んの行動、思考、人物像とも合わないのでは…。

手元に、「新編新美南吉代表作集」（半田市教育委員会編集
発行）があります。平成六年発行とあります。その頃に、南
吉記念館で購^{こうにゆう}入したものです。その中に、南吉自筆の「権
狐」が所^{しよしゆう}収されていました。「ノートに書いた草稿」。「鈴木

三重吉が添削てんさくしたものと考えられる」という解説も入っていました。読みにくいこともあり、しっかり見ないままでした。二〇〇七年度、立命館小学校の四年生に授業するとき、読み直してみました。

2 南吉作の整合性

南吉作（この後、自筆原稿をこのように記します）の「かみくだき」の部分を読んでみました。次のように書かれました。

「権狐は、ほっとして、鰻を首から離して、洞の入口の、いささぎの葉の上において洞の中にはいりました。鰻のはらは、秋のぬくたい日光にさらされて、白く光っていました。」

南吉作では、「かみくだ」いていないのす。いささぎの葉（ひさかきの葉…さかきに似ている。さかきの代わりに神仏用に使う地域がある）の上におきます。「鰻のはらは、秋のぬくたい（あたたかいの方言）日光にさらされ、白く光っていました」とあります。ごん的心情だけでなく、うなぎの魂まで感じさせるかのような情景が描かれていたのです。

南吉作を全部、読んでみることにしました。それが、『校定新美南吉全集10巻』（大日本図書）の中で活字化されていることを知りました。資料的な扱いでした。

驚きました。現在、南吉作として流布されている『ごんぎつね』は、南吉作が雑誌「赤い鳥」に掲載される際、大量の

の添削がなされていることが分かったのです。雑誌に掲載された方を「赤い鳥版」と呼ぶことにします。

「赤い鳥版」では、南吉作にある尾張知多地方の方言は、すべて訂正されていることがわかりました。その他、とくに重要であると思われる点を紹介します。

①場面三の中で、「赤い鳥版」は、「ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました」とあります。この部分、南吉作は、「何か好い事をした様に思えました」とあります。「赤い鳥版」では、「つぐない」という言葉によって、物を届けるごんの行動が最後まで、「つぐない」のように思えてしまいます。「赤い鳥版」では、場面四の最後で、「神

様にお礼を言うんじや、おれは引き合わないなあ。」とごんは言います。「つぐない」が報われないという損得感情が浮上しているように見えてしまいます。南吉原作は、「神様がなくなりやいいのに」「神様がうらめしくなりました。」とあります。「ひとりぼっち」であるという、同じ境遇に対する同情心と悲哀感とは、この段階で、求愛の心に変化してように南吉は表現していたのです。

②場面三で、いわし屋に殴られた兵十のうちに行ったあと、「赤い鳥版」では、「まつたけも持っていきました」とあります。南吉原作は、「まつたけ」でなく、「きのこや、薪」とあります。その後、さらに、重大な一文が南吉作にはあるので

す。

「そして権狐は、もういたずらをしなくなりました。」

場面三の最後で、主人公「ごん」の心が劇的に変化していたのです。主人公の心情が、何によってどう変化したか。これは、作者が最も力をこめて描く箇所です。作者∥南吉の意図は削除されてしまったのです。

次の場面四、加助と兵十の後をおいかけるごんの足どりの軽さは、「いたずらをしなくなったごん」の行動として読むと、見事につながります。

③最後の場面、「兵十はかけよってきました。」の一文で、いったい、いくつの授業が行われてきたことでしょうか。「かけよ

つてきた兵十は何を見ましたか」という発問に対して、子どもたちの多くは、「ごんがどうなったか見に来た」と答えます。それに対して、「うちの中を見ると」という言葉を根拠ごんきよに、「どんないたずらをされたか見に来た」という意見が出されます。教師もその意見を採用。読解が深化するという形です。ところが、南吉作には、次のように書いてあります。

「兵十はかけよって来ました。所が兵十は背戸口に、栗の実が、いつもの様に、かためておいてあるのに眼をとめました。」

「うちの中を見る」とは書かれていないのです。ごんをうったあと、かけよって来た兵十は、かためておいてある栗の

実に、「眼をとめた」のです。「うちの中を見る」は、「赤い鳥」による添加だったのです。その不自然な表現をつついて、言葉を根拠にした「名授業？」が生まれていたということですね。私も、何回もそのような授業をしてきました。

④ 「眼をとめた」あとの、南吉作を紹介します。

「おや——」。

兵十は権狐に眼を落としました。

「権、お前だったのか……。いつも栗をくれたのは——」。
権狐は、ぐったりなりました。うれしくなりました。

ダツシユは、何と七字分もあります。驚き、気づき、後悔等、複合した兵十の精神状態を南吉は、この七字のダツシユで表現したのです。「赤い鳥版」は、次のように書き換えています。

「『おや。』と兵十はびっくりしてごんに目を落としました」。

なお、七行分のダツシユは「校定全集」も一字分しかとつていません「お前だったのか」の後の六点リーダーも、そのまま味わいたいと思います。

⑤そして、最後の箇所。「赤い鳥版」は、「ごんは、ぐったり

と目をつぶったまま、うなずきました。」。南吉作、「ごんは、ぐったりなつたまま、うれしくなりました。」。

南吉作では、「うれしくなりました」とごんの心情が書いてあるのです。撃たれてしまつて、大変に「わりにあわない」状態です。そのごんが、「うれしくなりました」のでは、不整合ふせいごうになつてしまいます。だから、削除したのでしよう。しかし、撃たれてもなお、「うれしくなりました」と思った「ごん」の心情を、「権狐」という作品で南吉が描いていたのです。

南吉原作は、「悲哀は愛に変わる」という南吉の思想を具体化した作品だったので。

3 南吉生誕一〇〇年の年に

もし、宮沢賢治の自筆原稿の童話が後から見つかったら、方言はもちろん、一言一句修正せずに公にされると思います。前述したとおり、「権狐」も公にされていますが、子ども達も達が読む形にはなっていない。

南吉の自筆原稿「権狐」は、南吉自身の思考、思想が整合的に盛り込まれている作品になっています。この原稿が書かれた二〜三か月後に、「赤い鳥」一九三二年一月号に掲載されています。南吉の自筆原稿を新美南吉の原作とし、添削されたものを「赤い鳥版」または、「鈴木三重吉版」として扱うべ

きではないかと思ひます。

実は、多くの研究者が、この自筆原稿について触れてこられました。詳しくは述べませんが、概して評価は低いのです。

「赤い鳥版」を「南吉の習作に職業作家鈴木三重吉が磨きをかけた作品」とまで評される方もあるのです。

私は、南吉作を知り、何よりも子どもたちに伝えたいと思ひました。二〇〇八年度、二〇〇九年度の四年生に対して、「赤い鳥版」と「南吉作」を対比的に取り上げ授業しました。共に、公開研究会で見えていただきました。その授業実践の一端は『国語科言語活動の充実事例』（明治図書二〇〇九年）に所収してあります。

なお、この拙著を新美南吉記念館の山本英夫館長にお届けしたところ、「権狐・完全版」として掲載したものを「南吉自筆」と詳細に照合してくださいました。私が「完全版」としていたものにくつかの誤りがあることが分かりました。ご指摘を受けた部分を訂正し、より原作に近い版を作成した上で、今回の「南吉オリジナル版」をまとめました。山本館長には、感謝の言葉もありません。

今回、同僚の横澤茂夫先生、室田太郎先生のお力添えを得て、室田里香さんに挿絵を描いていただきました。A3の画用紙に水彩で描かれた労作ばかりです。里香さんご自身、南吉原作を何度も読解されたことが分かります。南吉の文章と

里香さんの絵が響きあい、南吉が描きたかった「権狐」の世界が鮮やかに浮かび上がってきます。室田さんの絵がなければ、「南吉原作」はこのような形で日の目を見ることはありませんでした。本当にありがとうございます。

南吉生誕一〇〇年の年に

二〇一三年五月三十日

岩下 修

[先頭ページにもどる](#)

南吉オリジナル版「ごんぎつね」

新美南吉・作（自筆「権狐」より）

室田里香・絵

岩下 修・現代版制作、解説

二〇一三年 五月三〇日発行

(C) 2013 O. IWASHITA R. MUROTA